

Distribution and diet of shortfin mako shark (*Isurus oxyrinchus*) in the waters off Sanriku

○仙波靖子(東大院農)*1・中野秀樹(遠洋水研)*2・青木一郎(東大院農)*3

*1 Yasuko Senba, *3 Ichiro Aoki (Department of Aquatic Bioscience, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo), *2 Hideki Nakano (National Research Institute of Far Seas Fisheries)

【背景】アオザメ(*Isurus oxyrinchus*)は世界の温帯～熱帯域の外洋域に広く分布し、最大体長4mに達する大型のサメである。本種は日本近海にも分布し、中でも黒潮親潮移行域に当たる常磐～三陸沖は、本種の重要な漁場の一つである。当海域は、小型浮魚類の産卵場、生育場として利用されており、春～夏にかけて南から魚食性魚類が来遊し、北へと分布域を広げて行くことが知られている(長澤 1999)。板鰓類では、ヨシキリザメ、ネズミザメ、アオザメ等が主に見られ(川崎ら 1962)、特に、ヨシキリザメとネズミザメの生育場として重要な役割を果たしていると言われている(長澤 1999, 中野 1994)。しかし、当海域におけるアオザメの分布生態に関する知見は、漁獲が少ないこともあり、非常に限られている。本研究では、常磐～三陸沖で行われた延縄操業で収集された漁獲データ及び食性のデータを用い、アオザメの分布様式及び本種の生活史における当海域の意義について検討した。

【方法】2000年～2004年の4月～10月(8月は除く)にかけて遠洋水産研究所が常磐～三陸沖で実施した延縄調査の漁獲データをもとに、体長及び性別ごとの分布を調べた。また、調査船で漁獲されたアオザメ91個体(尾鰭前長58～158cm)を計測後解剖し、食性及び成熟について調べた。

【結果と考察】4～7月上旬の常磐～三陸沖で漁獲されたアオザメの体長組成を調べた結果、150cm以下の未成魚が優占しており、50～100cmの当才魚を含む幼魚と100～150cm未満の亜成魚が多獲された。幼魚と亜成魚のCPUE(1000針当たり漁獲尾数)を較べた結果、幼魚は狭い場所で密に分布する傾向が見られたが、亜成魚は幼魚よりも広い範囲に分布する傾向が見られた。また、妊娠個体は1995年の1尾を除き、漁獲されなかったが、調査船で標識放流した個体の目測体長のデータからは、成熟に達したと思われる体長のメスが3～6月にかけて記録されており、これらのメスが次第に北上する傾向が見られた。これらのメスは、6月には、当才魚が高い密度で分布していた海域(35°N, 150°E)の付近で漁獲されたことから、この海域はアオザメの出生場となっている可能性が示唆された。また、胃内容物を解析した結果、当才魚では空胃の個体は少なく、小型浮魚類及びイカ類を主に捕食している事がわかった。一方、100cm～150cmの亜成魚では、イカ類の他に、シマガツオ、ソウダガツオ等の比較的大型の魚類が見られた。イカ類は、下顎板を用いた同定を行った結果、これまでにタコイカ、ムチイカ、ドスイカ、ホタルイカ等、11種が見られた。黒潮親潮移行域には、小型浮魚類の他にも、イカ類では37種が採集された報告例もあり(森ら 1999)、餌となる生物が豊富に分布していると考えられる。このことから、当海域はアオザメの未成魚にとって重要な生育場である可能性が示唆された。

シンポジウムでは、1990年～2002年にかけて、同海域で周年収集された近海マグロ延縄漁船の漁獲データもあわせて、本種の分布と移動に関する検討も行う予定である。